

【元安川灯籠流しについて】

「灯籠流し」とは、死者の魂を吊って灯籠や、お盆の供え物を海や川に流す日本の行事のひとつです。福島、神奈川、新潟、広島など日本各地で行われる他、現在ではハワイ、インド、タイ、ブラジルなどと世界各地にまで広まり、お祭りの中でも行われるようになりました。

先日、私たちが体験してきた、広島の元安川の灯籠流しは、毎年8月6日の18時から行われています。

そこで灯籠に使用されている「色紙」のうち、「白色」は原爆の子の像に向けられた折鶴を再生した色紙もあります。

また、灯籠のろうソクに灯す火種は、福岡県八女市星野村で保存されていた、「原爆の残り火」が使用されています。

【元安川灯籠流しを体験して心に残ったこと】

私が灯籠に願いを込めて書いた言葉は、P E A C E、平和で幸せな世界という言葉です。この言葉を流したのは、70年前のあの日から、平和で幸せな未来へと、川を流れるように、おだやかに続いて行ってほしいと思ったからです。

元安川には、たくさんの人々の思いが流れていきました。核兵器のない、皆が笑顔で暮らせる世界になりますように、もう二度と戦争が繰り返されませんようになど、幸せな未来への思い、願いを流している人が多く見られました。これらのメッセージが届き、叶うことを願っています。

元安川での灯籠流しは、8月6日の夜に行われました。それは、原子爆弾が広島に投下された日です。昼間の記念式典では、照りつける太陽に、目まいがするような暑さでしたが、灯籠流しのときには、むせるような蒸し暑さでした。ちょうど70年前も、今日と同じだったのかもしれないと、被爆された方々の苦しさや辛さを想像していました。

この元安川には、大勢の被爆された方が、のどの渇きをいやし、助かりたいという一心で、川に飛び込んだと聞きました。色とりどりの灯籠が流される、優雅な川の景色からは想像がつかないくらい、悲惨で残酷な光景だったに違いありません。

この日も、多くの方が灯籠を流していました。灯籠の数だけ、被爆して亡くなられた方々の魂を供養しているんだと思うと、改めて平和の大切さを考えさせられました。

【元安川灯籠流しを体験して学んだこと】

元安川を流れる灯籠はとてもきれいでした。でも70年前の8月6日にはこの川で灯籠と同じくらいたくさんの方が流されていたのだと思うと、とても複雑な思いになりました。

灯籠流しには、原子爆弾で亡くなったたくさんの人たちへのそれぞれの思い、そして平和を願う気持ちがこめられているのだと感じました。

また戦争は、人を傷つけるだけで、ひどいものだけでしかないと改めて感じました。灯籠の灯りを見ながら僕たち若い世代は、きちんと日本が経験した戦争を知り、世界で唯一の被爆国としてどれだけの被害を受けたかを知り、平和のために語りついでいかななくてはならないと改めて思いました。

私は、たくさんの人々が平和を願って、灯籠を流している光景を見て、もう戦争を二度と起こしてはいけないという使命を感じました。あの日から 70 年経った元安川は灯籠の淡く穏やかな光で溢れ、とても美しい光景でした。そんな光景が、70 年前は、血と炎と叫びと山のような死体が溢れる地獄のような世界だったと思うと、亡くなった人々が我々に何を伝えたかったのかが感じ取れました。その時私は、自分が灯籠に書いた「私達が平和な世界を作ります。」を亡くなった人々に届くように、気持ちを込めて流しました。

以上